

心は眼で見ることのできるような物ではないが、そうかといって空でもない。心は心と物という二つの立場を超えるが、そうかと言って、虚空のようなものでもない。

大乘の菩薩ははっきりと、空と不空を認めるが、小乗の声聞（修行者）は空を認めるばかりで、空でないものは認めないから困るわけだ。
（同『達摩の語録』一八六頁参照）

空は、無ではない

ここで達摩が説いている「大乘仏教の心」とは、空であるとともに、また空でもないというのですね。このような心こそ大乘仏教の説く大切な空の心であって、空と言っても何もないというような、いわゆる「虚無」ではないのです。

このことは、皆さんご存じの『般若心経』に、「五蘊皆空」、すなわち

「色受想行識という五蘊（五つの要素）ででき上がっているこの世界は、すべて空である」と説いていながら、同時に、「色不異空、空不異色、色即是空、空即是色」（色は空と同じ、空は色と同じ、色がそのまま空であり、空がそのまま色である）と説いています。

つまり我々の眼に見える物（色）は、すべて空であり、その空がわれわれの前に見えるものとして現われているに過ぎない、と説いているのです。この般若の空観をめぐってなされた問答を、もう一つ挙げておきましょう。

問う 自分の心というものは、どのようにして対象を造り上げるのですか。

達摩 自分のこの身体も、もともとからある物ではなくて、自分の心が分別して、あると思っっているに過ぎないのだ。

また、すべて物はもともとから無いのだ、と言うとき、物が無

いのはもともとから無いのではなく、自分の心が分別して無い
 と思っっているに過ぎないのだ。一切の存在についてもまったく
 同様で、すべて自分の心が分別して、有るとか無いとか言っ
 ているに過ぎないのだ。
 (同『達摩の語録』一九七頁参照)

一心とは

達摩大師から数えて十代目の祖師に、黄檗希運おうぼくきうんという人があります。黄
 檗りんざいぎげん師は、臨済義玄ごそくじんが師と仰いだ人で、五祖弘忍ごそくじん(六〇一〜六七四)の下で
 北宗禪と南宗禪との二つに分かれた法系のうち、南宗禪の法を伝えた祖師
 であります。

この黄檗の語録に、『伝心法要でんしんほうよう』というよく知られた語録があります。
 この語録は文字通り、如何にして禪の心を伝えるべきかを説いたものであ
 りますから、ここでもぜひ触れておきたいと思います。

以下の問答は、その『伝心法要』からの抜粋です。わかりやすく意識し
 ておきましょう。

黄檗和尚は裴休はいきゅう(七九七〜八七〇)。黄檗和尚に参禅し、寺を建てて禅宗を
 外護した唐時代の官僚)に向かつて言われた。

あらゆる仏と一切の衆生(生きとし生けるものすべて)は、ただこの
 同じ一心に他ならないのであって、それ以外の何物でもないのだ。こ
 の心は永遠の昔からこのかた、生滅せず、青色でも黄色でもなく、形
 や姿もなく、有無を超え、長短や大小を超え、あらゆる計量や相對価
 値を超えて、「口だ有るのみ」。だから少しでもこれは何か、と疑いを
 持てば、ただちに取り逃がしてしまうのだ。心はちやうど宇宙が無限
 で、測ることができないようなものだ。

この一心こそが仏であって、そこにはもともと、仏も衆生もありは

しないのだ。ただ迷える衆生は、心というものがあるかのように思っ
て求めようとするから、却って見失ってしまうのだ。有りもしない仏
や心というものがあると思うから、いつまで経っても手に入らないの
は当たり前だ。

一度そんな考えを捨ててさえしまえば、仏はみずからお出ましにな
る、というものだ。そうなれば、このつまらぬ自分がそのまま仏であり、
仏とはこの迷いの衆生に他ならない、ということもわかるであろう。

(筑摩・禅の語録8『伝心法要・宛陵録』六頁参照)

心を空くうぜよ

黄檗は、さらに続けて言われる。

凡夫は周りの世界に引き回されるが、道人どうじん(禅の修行者)は心に従う。

世界も自己も忘れ去ってしまえば、そこに真の法がある。しかし実際、
世界を忘れることは易しいが、心を空くうにすることもなかなか難しいぞ。

なぜなら凡夫は、心を忘れたら虚無に落ち入るのではないか、と思っ
てしまうからである。とんでもないことだ。無心にさえなれば、世界
にあるすべてのものが、あるがままの真実に返るだけなのに。

この心の本質は虚空と同じで、生滅するものでもなく、有でも無で
もなく、浄と穢を超え、喧と寂を超え、形もなく、内と外もなく、数
量もなく、形も音もない。したがってそのようなものは、求めること
さえできないし、智慧を以て識ることもできない。また、言葉で説明
することもできない。

こうなると諸仏や諸菩薩、衆生(生き物)は、すべて本性が同じなのだ。
精は心であり、心は仏であり、仏は法である。少しでもこの真実か
ら離れると、すべては妄想となってしまう。心を以て心を求めたり、

仏を以て仏を求めたり、法を以て法を求めたりしてはならないぞ。修行者はただ無心に黙って肯く（黙契する）だけだ。

（同『伝心法要・宛陵録』三〇頁参照）

達摩の一心

別のところで黄檗は裴休に向かって、次のようにも説いておられます。

達摩大師が中国に渡ってこられて、唯だこの一心のみを説き、唯だこの一法を伝えられたのだ。（中略）法は説くことのできない法（不可説の法）であり、仏は手にすることのできない仏（不可取の仏）である。これが本源清浄心ほんげんしじょうしんというものである。

（同『伝心法要・宛陵録』三八頁参照）

更に黄檗は、次のようにも説いておられます。

十方の仏を供養するよりは、一人の無心の道人を供養するべきだ。どうしてかといえ、無心には一切のあれこれを区別する心ぶんべつしん（分別心）がないからである。そのような心は内面では、木や石のように揺れたり動いたりしないし、外的には大空のように何かに塞がれたり、妨げられたりすることがないからである。

また能動的に何かしようとするものでもなく、何かされるといふような受動的なものでもない。この心には、はたらく方向も姿もない。また、何かを得るとか失うということもない。

残念ながら道を目指す人には、このような無心に踏み込む勇氣がないことだ。そのような虚無に落ち込んで、自分を見失っては大変だと恐れるからである。そしてこの崖に臨んでは引き下がってしまい、た

だ遠いところからそういう心を知りたいと思うばかりである。こうして、無心ということを知っていただけで、実際に手にする者は、滅多にいないのだ。 (同『伝心法要・宛陵録』一二頁参照)

身も心も実体ではない

また、無心ということを知って、「本心」と言い換えて、次のようにも説いておられます。

修行者よ、疑ってはならないぞ。身体というものには地水火風ちすいかふうという、四つの要素(四大)が集まってできあがっているに過ぎないのだから、そのような身体には、自我じがとか、主体したいというもののあるわけではない。心こころというものを見ても同じことだ。心などというものも、五蘊ごうん(物質・感覚・心に浮かぶ像・心のハタラク・知るハタラクの五つ)の集まりだ

から、そのものに自我や主体はないのだ。要するに存在するものは、すべてこのような要素の集合に過ぎないのであって、すべては空くうなのである。そういうなかで、ただ「本心」だけは、無限むげんに清浄しょうじやうなのだ。

(同『伝心法要・宛陵録』二五頁)

黄檗が『伝心法要』において、言葉を尽くして説かれている「心」は、おおよそこのようなものであります。読者の皆さんは、このように祖師たちが親切に説かれる語録を読めば、禅僧が求める心こころというものの内容がどういうものか見当が付かれることと思えます。

ここまで私は、「仏心宗」を自負する禅宗の祖師たちが、どのようにして眞実の心(無心の心)というものを伝えてこられたかを、ごく初期の禅録から引用してみました。

しかし、いくらそのことが頭でわかったとしても、実際に自分でそうい

う大切な禅心をどのようにして手に入れるか、これはまったく別の問題です。幾ら頭で理解できても、そういう心を実際に自分のものとしなければ、意味のないことになります。そこに禅宗が「体験を重んじる」理由があるわけです。

□ 第六章 天地を超える心

栄西の禅

日本臨済宗の初祖は、京都建仁寺の開山、栄西禅師（一一四二～一二一五）です。この人は八宗兼学の道場と言われた比叡山に登って、仏教の学問を修めた後、二回に亘って中国に留学されました。二回目には、インドに渡ろうとして果たせず、そのまま五年間も滞在して中国の仏教を学び、最後に天台山の虚庵懐敏（生没年不詳）という禅僧の下で坐禅修行し、最終に天台山の虚庵懐敏（生没年不詳）という禅僧の下で坐禅修行し、臨済宗黄龍派の禅を伝授されて帰って来られたのです。